

《研究ノート》

グローバル人材の育成を視野に入れた高大接続教育の研究(2)

ー国際教育における「アクティブ・ラーニング」モデルの考察ー

山 片 崇 嗣
藤 本 光 司

1. はじめに

昨今の日本を取り巻く社会情勢を鑑みると政治、経済、環境等その他あらゆる分野において今後日本が世界に果たす役割、また日本国の更なる発展において、真価を問われる大きな岐路に立たされているように感じる。現在各省庁がその英知、専門性を全力で活かし、可及的速やかに取り組んでいる。

中央教育審議会答申（2014）『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』の中で「学校教育においては、各学校段階における質の高い教育と相互の有機的な連携を通じて育むべきものであり、そのために多くの関係者が努力を重ねている。（中略）我が国の将来を担う生徒・学生が、これからの時代に求められる力を確実に身に付け、それぞれの持つ可能性を最大限に伸ばすためには、高等学校教育、大学入学者選抜、大学教育の在り方を一体としてとらえ、その円滑な接続と連携のもとに、高等学校教育の質保証、大学入学者選抜の改善、大学教育の質的転換を進めることが喫緊の課題となっている。」¹⁾ とし、我が国の今後の教育の在り方の改革の必要性を説いている。

他方、同省は同様に今後ますます拍車がかかるであろうグローバル化社会において、世界的に活躍できる人材育成を焦眉の急とし、改革に拍車をかけようとしている。「グローバル化、情報化、少子高齢化など社会構造が大きく変化し、先を見通すことの難しい時代にあっては、生涯を通じ不断に主体的に学び考える力、予想外の事態を自らの力で乗り越えることのできる力、グローバル化に対応し活力ある社会づくりに貢献することのできる力などの育成が特に重要となる。」¹⁾ と教育改革において国際社会に対応できる人材、環境作りの必要性を言及している。

この通り、文部科学省はこれまで通りの教育ではその目標を達成することは困難であると考え、「高大接続改革」と称して様々な教育活動の取り組みを進めていくことを発表し、その内容にグローバル人材育成についても明記されている。

前稿では国際教育活動において中等教育でのアウトバウンド事業に特化し、筆者の勤務校である芦屋学園中学校・高等学校（以下、本校）における海外派遣プログラムの数々を報告、考察した。本稿ではその本校の取り組みで明らかとなった課題を踏まえたうえで、理想的な国際教育の方向性を高大接続事業の観点から考察し提言したい。特に文部科学省が今後の高大接続教育の要とする『学力の3要素』を育むための最適な教育財を国際教育活動の観点から考察したい。加えて文部科学省が現在進めようとしている多種多様な高大接続教育改革において、「アクティブ・ラーニング」のメソッドも念頭に置きながら将来日本が様々な分野で世界的に高い競争力を保持し、継続的かつ恒久的にそれが担保することが可能な教育システムの構築を模索するものである。

2. 高大接続教育における「学力の3要素」とは

文部科学省は先述の中央教育審議会答申（2014）『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について』¹⁾の中で「学力の3要素」を骨子とし，教育改革の基本指針としている。下図の『高大接続教育の必要性』²⁾にあげられているように「高等学校教育」「大学教育」「大学入学者選抜」を改革の三つの柱とし，三位一体で高大接続教育を確立し，そのすべての指針の根拠となるものとして「学力の3要素」が学校教育法として定められ，その3要素を教育実践の主旨とする，と解説している。またこれらは，子どもたちがこれからの時代を生き抜くために必要な力と位置付けられている。

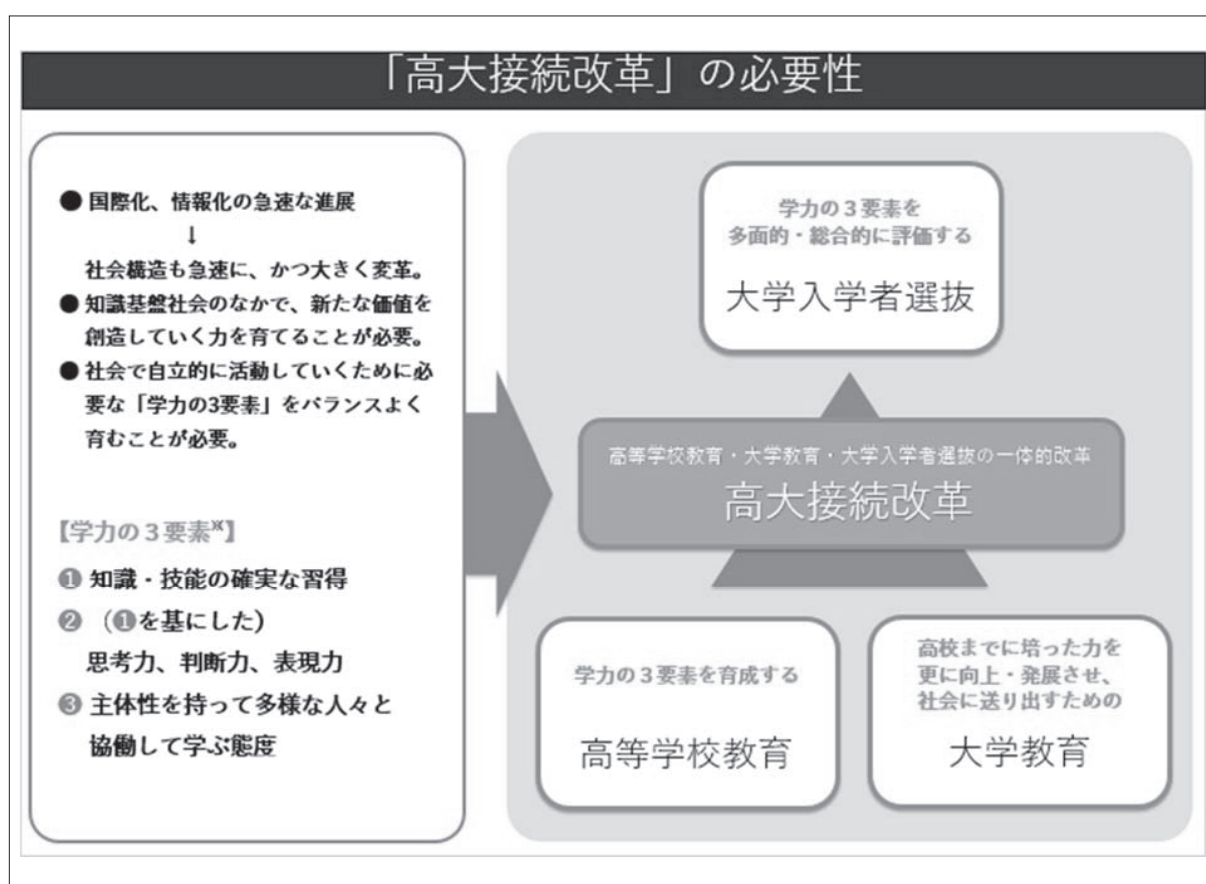


図1 「高大接続教育の必要性」²⁾

ファンオブライフの Education Career (2019) によると学力の3要素を以下のように定義づけしている。以下にまとめると，①「基礎的な知識及び技能」，②「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力」，③「主体的に学習に取り組む態度」と位置付けている。³⁾

① 「基礎的な知識及び技能」

ここでいう知識・技能とは，学習の基礎・基本になるものを指す。具体的に言うと，算数の計算や漢字の読み書き，文章の読解など。留意する点は，その知識や技能があるか無いかをみるのではなく，「あること

が前提」として、それらをどう使いこなしていくかが重要視されているということである。

これは、主体性・多様性・協働性のそれぞれの態度を指し、課題に対して自ら能動的に行う主体性、多くの人と関わってさまざまな意見を得ていく多様性、周囲と一緒に解決していく協働性のこととしている。2020年度からの大学入試では、この主体性・多様性・協働性を適切に評価するために、小論文や面接・ディベートなどが取り入れられると言われており、高校までの学習や活動の履歴などの資料も積極的に活用されるようになるとされている。

具体的には「知識・技能」は教育現場で教えようとしている「生きる力」の最初の要素であり、社会の中で生活し働くための「知能・技能」の習得であると位置づけている。これは「何を理解しているのか、何ができるのか」を示すもので学力の3要素の土台であり、個別の知識のみならず、学習内容が相互に関連づけられて社会の中で生きて働く知識を示唆する。例えば、今まで歴史の授業で習った過去の出来事を年表通りに暗記するだけでなく、なぜその出来事が起こったのか、そしてその後どのような影響を後の世に及ぼしたのかなど学習に盛り込む事で、深い理解につなげることを主眼に置いている。また、歴史上の出来事は現在にどう関わっているのかといった現代まで地続きの学習を行い、社会で生きるための知識と技能に繋げることをも目的としている。

②「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力」

思考力・判断力・表現力などの力が必要となる。そして、これらの力が身につけているかどうか、大学入試では全教科を通して総合的に問われることになる。例えば、知識や技能がどのように使えるか考えられているかどうか、で思考力が文章や図表など与えられた情報から必要な情報を読み取れているかどうかで判断力、目的や意図を明確にしなが論理的に説明できているかどうかで表現力が判断される。

「思考力・判断力・表現力」は、知識・技能の上に築かれる「思考力・判断力・表現力」である。「理解していること・できることをどう使うか」を育てることによって未知の状況にも対応できる力を養う。現代は変化が激しく将来の予測が困難な社会です。そういった状況の中でも物事の中から問題を見つけ、解決の方向性を決め、方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行して次の問題発見と解決に繋がられる力を養うことを目的としている。

③「主体的に学習に取り組む態度」

最後に「主体性・多様性・協調性」はいわば、学びを人生や社会に生かそうとする「主体性・多様性・協調性」である。この要素によってどのように社会と関わり、より良い人生を送れる力を身につけられるようになる。またこれは学びを人生や社会生活に生かそうとする「学びに向かう力と人間性」を育てることになるのである。培った知識・技能をもとに、思考力・判断力・表現力を使って情報をもとに自分の考え方を作り上げ主体的に学び、さまざまな考え方を理解し、多様な方法で自分の考えを表現してグループとしての意見を形成するといったことが含まれる。

これらの3要素は現在文科省が2020年度から本格的に実践を開始する「アクティブ・ラーニング」のメソッドと連携、相互補完するものであると考えられる。その「アクティブ・ラーニング」の「主体的、対話的な深い学び」に関して、それぞれの評価基準として、株式会社マイナビのMY FUTURE CAMPUS 運営事務局「キャリア教育コラム」(2018)は以下のようなモデルを設定している。

【主体的な学び】 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

【対話的な学び】 子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

【深い学び】 習得・活用・探究という学びの過程の中で，各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら，知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見いだして解決策を考えたり，思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。⁴⁾

これらの評価基準を具体化し，教育現場で実践するとなると，以下のような評価基準を挙げるができる。

- ・学ぶことに興味や関心を持ち，毎時間，見通しを持って粘り強く取り組むとともに，自らの学習をまとめ振り返り，次の学習につなげる。
- ・「キャリア・パスポート（仮称）」などを活用し，自らの学習状況やキャリア形成を見通し，振り返える。
- ・実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり，実社会の人の話を聞いたりすることで自らの考えを広める。
- ・あらかじめ個人で考えたことを，意見交換したり，議論したり，することで新たな考え方に気が付いたり，自分の考えをより妥当なものとしたりする。
- ・子供同士の対話に加え，子供と教員，子供と地域の人，本を通して本の作者などとの対話を図る。また，事象の中から自ら問いを見だし，課題の追究や課題の解決を行う探究の過程に取り組む。
- ・精査した情報を基に自分の考えを形成したり，目的や場面や状況等に応じて伝え合ったり，考えを伝え合うことを通して集団としての考えを形成する。

これらの評価基準，またはそれに準じた基準を高校や大学の教育現場に採用することで先述の学力の3要素に主眼を置いた教育目標を達成できることになるのではないだろうか。ただし，評価を数値化することの是非やその実現可能性については議論の余地があるように考える。

3. 高大接続教育における国際教育活動の実践例

3-1. 米国における高大接続プログラムの一例

すでに海外では高大接続教育は約半世紀前から実践されてきており，その効果と実績は実を結んでいるようである。米国の一例として，郭（2018）は「米国における高大接続を担当する教員の研修制度の役割と影響」において「高大接続制度として，理論と実践を融合した米国の Advanced Placement（以下，AP）プログラムを取り上げる。APの代表的な特徴は，①大学レベルの授業を高校段階で実施すること，②高校の教員がAP授業を担当することの2点である。（中略）米国における高大接続プログラムは主として2種類に分かれている。ひとつは Dual Enrollment（以下，DE）を代表とする，大学の授業をベースに，高校生が大学で授業を受けるプログラムである。もう1つはAPを代表とする，高校生が高校で大学レベルの科目を履修するプログラムである。これらの高大接続プログラムを履修することを通して，高校生が高等教育段階の知識を習得し，自分の興味関心がある分野を導くとともに，知識に対する批判的な思考力，自発的な探究力などを身に着けることが期待されている。」と評価している。

また，「APの特徴は以下の3点である。①高等教育段階の授業を担当するのは大学の教員ではなく，高校の教員である。②教員の育成，カリキュラムの開発，成績評価はCB（APを組織・運営するカレッジ・

ボードのことが担当する。③大学側は、教員育成への支援、学生が履修した科目の単位認定を行う。APと高等教育との関係は、i) 授業の履修経験や成績、試験のスコアが大学のアドミッションにおいて、有利な材料になること、ii) 試験のスコアが一定以上であると多くの大学において1-2年次の該当単位の履修を免除されることの2点である。大学の入試段階では、大学側は高校生のAP授業の経験を通して、高校生の高校での学力以外の能力を二段階、i) APを履修する経験を通じた高校生の学習意欲、ii) 授業への評価を通じた高校生の選択する分野への適切性、で判断することによって、大学のアドミッション・ポリシーに合った高校生の獲得に努める。APは、AP授業の受講経験と成績評価を通して高校教育と大学教育の間の「ズレ」を埋めることから、多様化している米国の高等教育の中で、大学と高校生双方のニーズを合致させ、高大接続を円滑に実現するには効果があると評価できる。」⁹⁾と述べており、制度面において事前に相当綿密にすり合わせを行ったこともうかがい知ることができる。また、高校と大学間での「飛び級制度」も高大接続教育の大きな目玉となりえることに言及している。

3-2. 国内における高大接続プログラムの例

一方国内においては、高大接続教育の実践実績は海外に比べ歴史は浅いようであるが、各教育機関において多種多様な実践がなされているようである。先述の米国の例にあったような飛び級制度は残念ながら日本では実用的ではなく、また諸般の事情により実践例は極めて限定的である。

APU（立命館アジア太平洋大学）や国際教養大学などで実践、推奨しているようにすべての授業を英語で行うことはもちろん、主体性や協働的な活動を求めて、討論やプレゼンテーション形式の授業スタイルを実践し、学生のモチベーションや論理的思考力を引き出そうという試みも始まっている。まだ高校レベルでの実践は軌道に乗ってはいないが、高大接続教育の三本柱である入試制度にまで「学力の3要素」の定着を評価する制度を整えば日本の高校、中学の中等教育の在り方は激変すると予測する。さらにそのトレンドはやがて、グローバル教育目標の根幹となる、「世界で活躍できる人材の育成」につながるものと確信する。

渋谷（2016）は「国際バカロレアにみるグローバル化と高大接続—日本の教育へのインパクトに着目して—」において国際バカロレア（以下、IB）の導入を検証する際にその根拠と期待できる成果について以下のように挙げている。

『日本ではごく最近まで、高校も大学もIBへの関心は低かった。しかし、近年、日本政府は、スーパーグローバル大学創成支援における国際開放度の成果指標として、入試においてIBの資格や成績を判定基準のひとつにすることを挙げるなど、強力にIB導入を促している。（中略）日本の大学は、IB入試を大学の国際化や質保障と関連付け、IB修了生に語学力や批判的思考力、大学のグローバル化におけるリーダー的役割を期待している一方、理数系の学力に不安を感じている。先進的にIB入試を始めた大学からは、IBスコアの信頼性や客観性、IB修了生のプレゼンテーション・スキルや批判的思考力を高く評価する声が出ている。

IB修了生がIBを選択した理由としては、海外進学、英語教育、教育内容の3点が挙げられた。（中略）IBを選んだ理由として挙げられた3点目は、IBの教育内容や方法への共感である。

では、生徒はIBでどんな経験をし、それをどう捉えているのだろうか。IBの授業が「好き」で選択したと言う前述の学生1は、次のように述べる。「黒板に向かってカリカリするのがちょっと苦手というか、（中略）ディスカッション型の授業とか、先生とこんなに近くで一对一の授業もあつたりするし、こんなに贅沢な授業を受けられるのは、やっぱりIBしかないなあと思って。」彼は、「東大とかを目指している」「日本のカリキュラムで受けている人達」は、「模試とかのテストでは点数はすごい」し、「もちろん全然私

達なんかよりも頭もいいし、勉強もすごいできる」と述べる。その上で、以前、彼らと英語でディスカッションをした際、彼らが「全然喋れなかった」という話をした。ここでは、「日本のカリキュラム」で学ぶ生徒達と IB で学ぶ自分達とが対置され、前者は「点数はすごい」「勉強もすごい」と従来の言葉で、後者は「コミュニケーション力」という今日的な言葉で評価されている。両者の違いは優劣ではなく、「慣れ」や「向き不向き」であり、自分にとって「楽しい」のは後者だと語られている。I 高の学生 2 は、卒業時に次のように述べている。「IB 教育はやっぱり思考力が変わったというか、何事も客観的に見れるようになったのが一番だと思っているんですけど。(中略)文章力も上がってきたし。思考力、みんなで考えて自分の意見に変えるとか。分析力も。ここで挙げられている「思考力」や「分析力」も、先の「コミュニケーション力」同様、今、求められている。』⁶⁾

また、松下 (2010) は「<新しい能力>は教育を変えるか-学力・リテラシー・コンピテンシー」において「ポスト近代社会、知識基盤社会、生涯学習社会で必要になるとされる〈新しい能力〉について、その原理・背景・歴史を批判的に検討し、それがもたらしつつあるカリキュラム・授業・評価への影響を考察する。」⁷⁾

とし、その考え方は先述の IB 導入の考え方に符合し、IB の導入を評価し、まさに文部科学省が推奨、目標とする主体的・協働的で深い授業を提供できることを証明している。またこの結果は文科省が推奨する「アクティブ・ラーニング」のメソッドにも通じるものである。

IB の導入とその定着には、相当の準備期間と優秀なスタッフ、そして膨大なコストがかかることが予想される。またその成果を適正に評価するには長い時間をかけて検証する必要があるだろう。しかし、これから日本の教育を受けた若者が海外で活躍し、リーダーシップを発揮できるようになるには、これまで述べてきたようなメソッドを研究、開発し、定着させることが必要不可欠であるように思う。同時に可及的速やかに実践段階に移していく必要がある。そうなれば近い将来、日本の教育は世界に秀でたものになりえると確信する。

そういった意味において高校と大学 (短大) の 7 年間、あるいは 5 年間を通して一貫するストーリー性を持った教育目標を設定できることは、高大接続教育の大きなメリットのひとつになりえると確信する。

4. おわりに

文部科学省が進める高大連携事業にはその本質に「学力の 3 要素」求めている。それには筆者も大いに賛同する。約 10 年前に本校の提携校であるイギリス、オーストラリアの高校に生徒を引率し、現地の授業を大変する機会を得た。その授業の内容に驚愕した経験を今でも忘れることができない。それはどの教科の授業も新鮮であったが、特に感銘を受けた教科は日本で言う歴史の授業である。日本では年号や歴史上の人物が成し得た、あるいは犯した大罪を事細かに覚えていく。そこには「誰が」、「いつ」、「どこで」、「何をした」という歴史上の事象をひたすら正確に覚えていくことに注力する。またその情報の暗記の度合いを日本では評価する。

しかし海外では、「なぜ」「どのようにして」それが起こったのか、「きっかけは何であったのか」を生徒たちに考えさせる。年号や人物名はそう重要なことではなく、どうすればそのことは避けることができたのか、それができなかったのはなぜなのか、また一番大事なことは自分ならどう対応したのか、あるいはその過去の反省などから何を学び、今後の人生にどう生かすのかを考えさせ、学ばせることに主眼を置くのである。すなわち必ず自分の考えを述べさせるのである。もちろん教室には 20 人いれば 20 通りの考えがある

はずで、必ず他の意見をたとえ少数であったとしても尊重させ、受け入れさせるのである。まさに多様性、寛容性を育ませているのである。

また数学の授業では、日本では決して経験できない授業を展開していた。その授業では、生徒みんなが計算機を所持し、問題を解いているのである。すなわち、視点が異なっているのである。日本と違って計算の答え合わせが大切なのではなく、計算自体は計算機があるのでそれに頼るのは問題ないのである。要はどんな公式を用いるのか、どんな解決法が一番効果的なのかを問われるのである。答えを求められるのではなく、そこに至る過程を評価するのである。すなわち論理的思考能力、問題解決能力を評価されるのである。

当時の私には衝撃的であったが、日本の教育に不安感と危機感を強く感じたことを覚えている。本稿ではこれからの日本の教育が目指すアクティブ・ラーニングについて様々なアングルから考察し、それが一定の評価をできるものであるということが明らかになってきたように思う。またそうであればこの考察は現段階では意義のあるものになったと考えてよいのではないだろうか。今後はさらに具体的な実践モデルを提言するために考察を深めたい。

【参考・引用文献】

- 1) 中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、学教育、学入学者選抜の一体的改革について」2014.
- 2) 中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、学者選抜の一体的改革について」「高大接続教育の必要性」2014.
- 3) ファンオブライフ「Education Career」2019.
- 4) 株式会社マイナビ運営事務局「MY FUTURE CAMPUS」「キャリア教育コラム」2018.
- 5) 郭 暁博「米国における高大接続を担当する教員の研修制度の役割と影響において」2018.
- 6) 渋谷真樹「国際バカロレアにみるグローバル化と高大接続—日本の教育へのインパクトに着目して—」一般社団法人 日本教育学会, 第83巻 4号, pp.423-435, 2016.
- 7) 松下佳代「<新しい能力>は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー」, ミネルヴァ書房 2010.

